新潟大学教育学部附属教育実践研究
指導センター研究紀要、9 (1990)

家庭と地域社会における人間関係を育成する生活マット・小物作りに関する実践的研究

A Practical Study of Elemental Material for Human Relationship in Family and Community

高 橋 類 子*・木 村 節 子**・岸 本 洋 子***・薄 田 恵 子****
本 多 満喜子*****・長谷川 かよ子******・桑 原 信 子*******
土 屋 道 子********・斎 藤 新 治*
Ruiko Takahashi*, Setsuko Kimura, Youko Kisimoto, Keiko Usuda
Makiko Honnda, Kayoko Hasegawa, Nobuko Kuwabara
Mitiko Tutiya, Shinzi Saitou.

ABSTRACT

1) In this practical study we try to develop the elemental material by which 'the human relationship in family and community' would be much consolidated. The number of pupils and students in all the grades of school and university who took part in this project is 1,102. They made various kinds of home mat and other toy-like material. These handwork activities caused the augmentation of mutual affection among the infant, the young and the old.

2) The human relationship can be classified in the following three types:

a) family-relationship in home,

b) infant-relationship in home and community,

c) aged people-relationship in community.

In each type we set an hypothesis, and examined its validity.

3) It was the result of our handwork occupation that all the particpants' interest toward an importance of human relationship was much aroused. Some of university students concluded that these small handworks are effective and valuable of developing human relationship.

* 新潟大学教育学部
** 実践センター実地指導講師
*** 新潟市立五十嵐小学校
**** 新潟市立大形中学校
***** 豊栄市立早通中学校
****** 県立中央高等学校
******* 県立巻高等学校
******** 新潟トイ・バスケット

I　はじめに

1987年の日本家庭科教育学会編「時代の変化に応えるカリキュラムの研究」の中で、著者ら（北陸地区課題研究グループ、1985～1987）[1]は「人間関係を育成する家庭科の学習内容」をテーマとして取り組み、小・中・高校と関連づけた家庭科教育課程の試案を作成した。

その中で家庭生活、食生活、衣生活、住生活、保育の5領域の内容について検討したことを受けて、本研究では、各学校段階の児童・生徒の成長・発達に合わせた「家族や地域社会の人々との人間関係」に視点を置いた。教材として生活マット・小物作りを取り上げ、その製作過程と作品を、お互いの人間関係や家族、幼児そして老人との心のふれ合いの手段として活用した。対象を小学校ではお互いの人間関係や家族、中学校では幼児そして高等学校では老人とし、それぞれ仮説をたてその検証のための実践研究を行った結果、対応する人間関係に有効な反応がみられたので報告する。

II　方　　法

1．研究対象

国公立小学校（児童）：5年生210名、6年生114名

国公立中学校（生徒）：3年生236名

公立高等学校（生徒）：3年生226名

国 立 大 学（学生）：　　316名

2．研究期間

1985～1988年度

3．研究方法

学習実践前のアンケート調査を基礎にして、指導案を作成した。生活マット・小物作りの供試試料は、従来あまり使用されていない素材を使用した。マジックでつく布地（クイックロン、フレンチパイル、ベルベットクロス）や音の出る小道具（鳴き笛）などを複合的に組合せ製作した。製作はすべて手作りとし、触れ合いの素地としての心を大切にすることを教材に盛り込み、その製作過程と作品を、お互いの人間関係や触れ合いの手段として活用した。

4．研究内容

1）家庭における家族との人間関係（小学校児童の場合）：小学校5年生は四季や雨に歌えばの布マットを利用して小物を製作し、製作時の楽しさ、作品を通してそれらにかかわる人のコミュニケーションをはかった。6年生は小物を家族への贈物にしぼり、贈られる者のことを思い製作品、贈り方等人間関係の深まりを体験させた。

2）家庭や地域社会における幼児との人間関係（中学生の場合）：幼児向けおもちゃの計画・設計に先立ち、室内や四季の布マットを提示し、グループまたは個人で「幼児のためのおもちゃ」を考案・製作した。保育学習の導入や人間関係育成に至るまでのアプローチとしては、学習過程A過程は生育歴と課外での触れ合い、観察からのアプローチ、B過程は保育園訪問の幼児観察と、共に触れ合う人間関係からのアプローチ。そしてC過程は生育歴と幼稚園訪問の双方からのアプローチの3過

程を設定し、人間関係の育成、幼児と接する態度の変容を比較・検討した。

3) 地域社会における老人との人間関係（高校生の場合）：生徒の老人に対する意識調査を基礎とし、生活マット・小物作りを発展させた形として、地域への実践を行い、その中で生徒の人間関係の育成、老人に対する態度の変容を観た。

4) 教材研究の立場からの教育的評価（大学生の場合）：各学校段階における実践前に、教員養成課程の学生レベルでの実験・実習等教材研究を行い、その効果を確認した。学校段階別授業実践後は、望ましい家庭科の授業の諸要素に対する認識を3点段落評点法で評価した。

5．データの処理

新潟大学情報処理センター・ACOS－830型で行った。

6．仮説の設定

1) 仮説設定前の状況

① 各家族の増加から児童・生徒の家庭と地域社会に触れ合いのできる幅広い人間関係が希薄である。 ② 児童・生徒の側に、対話をしたい、何か役立ちたいという触れ合いを求めている心情が存在するが、その活用方法に確信が持てない現実がある。 ③ 現行の学習指導要領の中に地域社会における人間関係に関する知識理解、実践的態度を学ぶ分野が少ない。

2) 仮　説

小学校：遊びと学習と仕事は、おとなにとっては別個のことであるが、子どもにとっては全く同一であり、子どもが自発性と興味の交互作用によって学習している実態は、経験的にも理解されている。

仮説 1．小物作り単元で、布マットで遊ぶ道具を作るという導入から興味関心を持ち、自発的に自分で作れる小物を創造し、意欲的な学習活動に入ることができると考えた。製作後は友だち、グループの協力遊びの過程を通して、人間関係の情意的な面の学びとりをすることができるであろう。

仮説 2．仮説1の認知的経験を発展させ、家族に贈る小物作りとして取り扱うことにより、技能の習得と併せて、家族との人間関係が一層深まり情意的な面を育てることができるであろう。

中学校：仮説 1．生活マットや鳴き笛、ベルベットクロスを用いることによって製作意欲が向上し、作品の範囲が広がるであろう。

仮説 2．幼児との触れ合い活動を通して生徒の幼児に対する意識や態度の変容が見られるであろう。

高等学校：仮説 1．老人との触れ合い活動を通して生徒の老人に対する意識や態度の変容が見られるであろう。

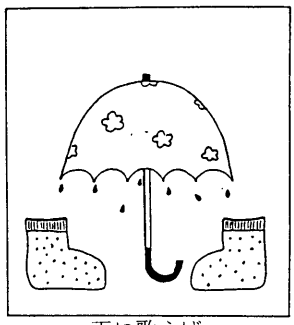
仮説 2．地域社会における社会的活動として、どう実践していったらよいのか具体的方法が考えられるであろう。

以上の学校段階別仮説に基づいて、学習対象者の興味関心を高め、創造力を豊かにし、人間関係の深まりを体験させたいと考え、授業実践・社会的活動と諸調査を行い仮説の検証を試みた。

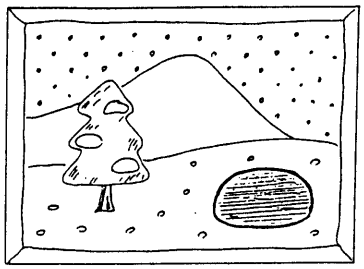
III　結果と考察

1．家庭における人間関係（小学校児童の場合）

5年生では小物作りの視点を変えるということで、布マット遊びをさせた。布マットの一例を図1に示した。



雨に歌えば



四季のマット（冬）

図1　布マットの一例

図1の雨に歌えばの布マットに雨玉があたり、大雨になる様子や、四季マットに小物を加えたり、移動したりすることで布マットの情景が変わる面白さが話題になった。この導入から図2に示すように従来の静的な小物37.8%から、使って遊ぶ動的な小物53.4%へと選択の比率が変わった。

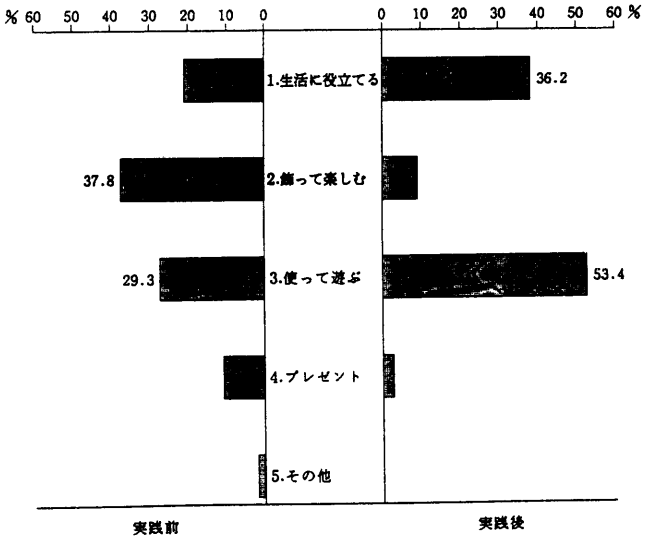


図2　製作したい小物の種類

布と糸そして針を使う小学校5年生の小物作りには、児童は非常に興味と関心があるが、技術が未熟であることが一番不安である。作り方がわからない時の指導者選択については、「母親の援助を望む者」が37.9%と1位で、次が「友だち」24.9%であった。そこでグループの組合せを配慮し、お互いに教え合って作ろうという共同思考、共同作業を活発にさせた。学習過程で実際に指導を受けた人は「友だち」同志の教えあいが分かり易く楽しかったとするものが34.5%と一番多く、母親

からの援助は32.7と5.2%減少した。指導者の選択理由では「わかり易く教えてくれる」が39.1%と最も高率であることが、表1に表われている。教えてもらった時の気持ちを表2に示した。「分かり易い、よく分かる」が50.3%、「なるほど、ああそうか」が25.6%で、約76%の児童が指導してくれる相手もOK、わたしもOKの好意的な関係を製作学習時に成立させたことが伺えた。

表1　指導者の選択理由

N＝201　　小文字：度数

単　位：％

理由 学年	1.聞きやすい	2.親　切	3.上　手	4.分かり易く教える	5.その他
5　年	58 28.7	20 10.0	42 21.3	76 39.1	2 0.9

表2　指導を受けた時の気持ち

N＝195　　小文字：度数

単　位：％

理由 学年	1.ありがたい嬉しい	2.分かり易いよく分かる	3.なるほどああそうか	4.むずかしい	5.その他
5　年	30 15.4	98 50.3	50 25.6	9 4.6	8 4.1

小物を選んだ理由を表3に示した。「むずかしいと思ったが作りたかった」が42.1%で、半数近い児童が技術面の不安を乗り越えて意欲的に取り組んでくれた。

表3　小物の種類を選んだ理由

N＝195　　小文字：度数

単　位：％

理由 学年	1.簡単だから	2.ほしかったから	3.むずかしいけど作りたかった	4.プレゼントに	5.その他
5　年	28 14.4	45 23.1	82 42.1	13 6.6	27 13.8

写真1に楽しみながら、苦労しながらつくった小物を示した。四季のマットからの発想でカニ、雪だるま、木、焼芋等が製作品として完成した。本研究対象の小学校は低学年から高学年まで縦割の組織を作って活動している。布マットを使っての小物製作の場合は、みんなで遊べることから、高学年の83%のものが「低学年に貸してやろう」という考えを示した。学習時だけでなく作品を通して人と心の触れ合いを大きく広げることが出来た。

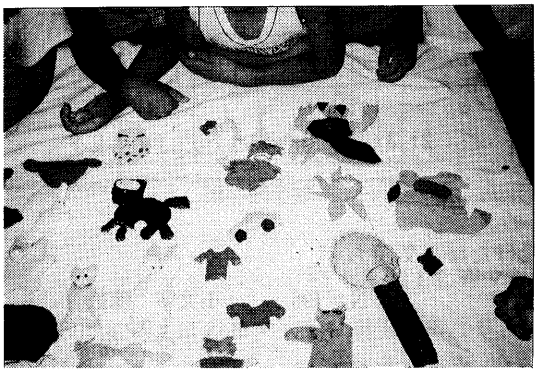


写真1　5年生が製作した小物

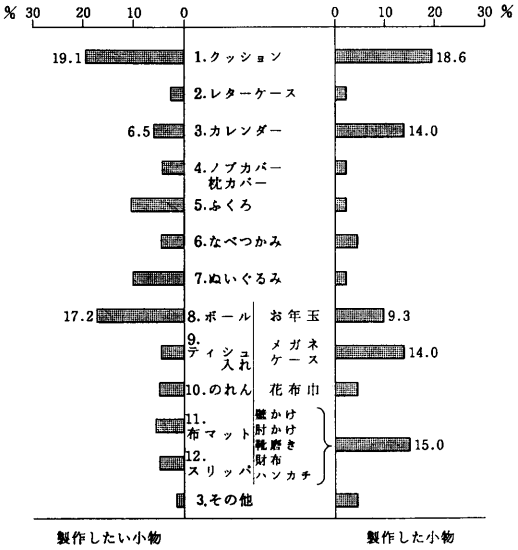


図3　小物を選んだ理由

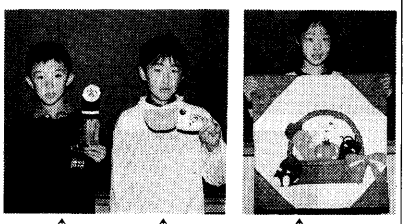
6年生の事前の意識調査「家庭生活を楽しくするにはどのような工夫が必要か」の結果では「両親・祖父母家族が仲良くすること・家族を大切にする」が最も高率を示した。家族を大切にするという児童の実態から、小物作りを家族への贈物を作ることに重点を置いて製作に入った。家庭生活を楽しくするために児童が考案した小物の種類を図3に示した。5年生の小物作りの体験から、家族みんなで使えるクッション、家族で遊ぶボールが32.6%と多かった。しかし、家族への贈物という視点で考えさせた結果、個人で使用できるメガネケース、ひざかけ、さいふ、靴みがきなど併せて29%、家族みんなで使うクッション、カレンダーなど共通の贈物が32.6%となり、家族を思う作品に変わった。

作品については、児童のアイディアや贈る気持ちを表わすために、小物の種類が多様となり、製作技術面での難易度の差が大であった。そこで教師の側の授業形式は個別指導を中心とした。グループを中心にした児童同志の学習は、認め合う好意的な人間関係の喜びが生まれ、パーソナリティを高め製作意欲を満足させた。6年生の家族への贈物は、図4の授業実践記録の中に写真を随所に挿入し、児童の学習のようすも分かるように示した。

現行学習指導要領の小物作りの単元は、個人の製作技術の修得をねらいとしているが、本研究ではさらに人間関係を育成することを目標とした。図5に示した児童の製作時の気持ちは「作るのが好き」が高率で、その内容は「楽しい、嬉しい」が多いが、使ってもらいたいという贈る人への気

小学校「家族への贈り物」授業実践の記録

——おじいちゃん・おばあちゃんへの贈り物——

教師の働きかけ	児童の反応	指導上の留意点
1. 作品鑑賞会をさせる ・作品が完成してからの反省や感想はどうかな	・友達の作品を見よう  ↑ ↑ ↑ まとい いれ歯入れ 座布団カバー ・どこを工夫したのかな ・材料や作り方は、どんなかな	・良い点を認めたり励ましの言葉をかけたりし、更に実践的意欲を高めるようにする。 ・今度作るとすれば、とういう意識で友達の作品を見せる。
2. 贈り方の工夫について考えさせる	・手紙を書けば喜ばれる ・カードにメッセージを書こう ・包装紙にかけて包んでリボンをかけるときれいになる。 ・宅急便で届けてもらおうか	・祖父母のことを思う気持ちを取り上げ大切にしたい。同居している・遠くはなれている等の事情にも少し触れたい
3. 自分の考えをまとめ作った物を贈られるようにさせる ・心のこもった贈り物にするために、包んだり書いりしよう	・心のこもった手紙を書こう ・イラスト等も書いて、メッセージカードにしよう ・作った物がちょうど入る箱に入れて箱を飾ろう。 ・包装紙で包み方を工夫しよう 	・カード・包装紙等は、なるべく廃物利用をさせたい。そのために、ある物を事前に準備させておく ・手紙や包装は、心をこめて贈るために取上げたが、余り時間がかからないよう配慮したい ・届けるのに児童の手では無理な場合もあるので、家庭への協力を依頼する

次頁へ続く

前頁より続く

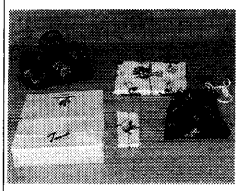
教師の働きかけ	児童の反応	指導上の留意点
	・リボンやカラフルなひも等できれい縛ろう 	
4. 次時までに、どんな事するのかを分からせる	・作品を贈った時の祖父母の様子 ・ハンドバック（男子）  おばあちゃんの言葉「ありがとう。さっそく病院に行く時に使うよ」 ・お手玉（男子） おばあちゃんからの言葉「なつかしいね。お手玉は手首の運動にいいのよ。家宝にするよ」 ・おじいさんは何度も手紙を読み返していた	・贈られる人の反応をみたり、その人・または、家の人の言葉をもらったりして喜びを味わわせたい。その際の自分の気持ちも次時では、発表させたい

図4　小学校授業実践記録

持ちも多く含まれていることがわかった。

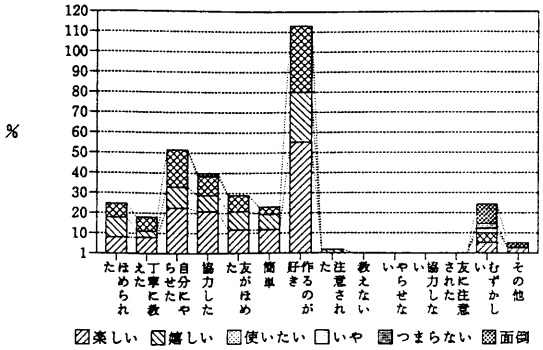


図5　児童の小物製作時の気持ち×理由

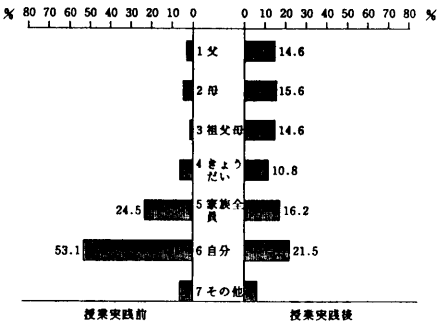


図6　小物作りの学習前後の調査結果

6年生の小物作りの学習前後の調査結果を図6に示した。自分の物を製作したいが53.1%と最も多かったが実際には、21.5%に減少し、家族全員のためにが16.2%、母へが15.4%、父と祖父母にはそれぞれ14.6%と家族への思いやりが広がった。家族や祖父母を思いやりながらの製作学習が好意的な人間関係を育成させる一要因であったと考えられた。

2．幼児との人間関係（中学生の場合）

中学校における保育学習は、とかく「おもちゃ作りのみに終始している」という批判を受けがちである。しかし、中学生にとって、幼児の存在は「かわいい」という感情で表現しているように、外面的なものからの受けとめ方が主であり、自分が直接に幼児と接しての情意には、なりきってはいない。そこで、「おもちゃ作り」という手段を通して、中学生に幼児を理解させ、完成したおもちゃを「実際に幼児に使わせたい。一緒に遊んでみたい」という気持ちにさせ、幼児との触れ合い、幼児とのよい人間関係を育成したいと考えた。そして、この触れ合いは、製作以前とは質の異なる幼児の立場や発達を考えたものであるようにさせたいと願った。

身近に幼児がいる生徒は、A過程は83.9%、B過程69.3%と高い割合を示した。身近な幼児との関係はほとんどが親戚や近所の子どもであり、弟妹はわずかであった。このことは、幼児の生活すべてに接する機会を持っている生徒は少ないが、一部分でも接する機会を持っている生徒が多かった。このため生徒が積極的に接しようとする気持ちがあれば、幼児ともっと触れ合うことができる環境にあり、保育の学習には比較的恵まれた条件であった。反面、幼児がそばにいない生徒はA過程で16.1%、B過程30.7%であった。これらの生徒に対しては、より注意深い配慮が必要であり、生育歴、幼児観察などの種々のアプローチを必要とした。

生徒の持つ幼児観では図7に示したように「かわいい」が圧倒的に多く、「弟や妹がいるとよい」「一緒に遊んでみたい」とプラス方向の感情が高率であった。一方、「うるさい」とマイナス方向の感情を持っている生徒もいて、中学生という年齢を感じさせた。全体的には、プラス方向が高率を示しており、幼児に対する感情は良いものを持っていた。

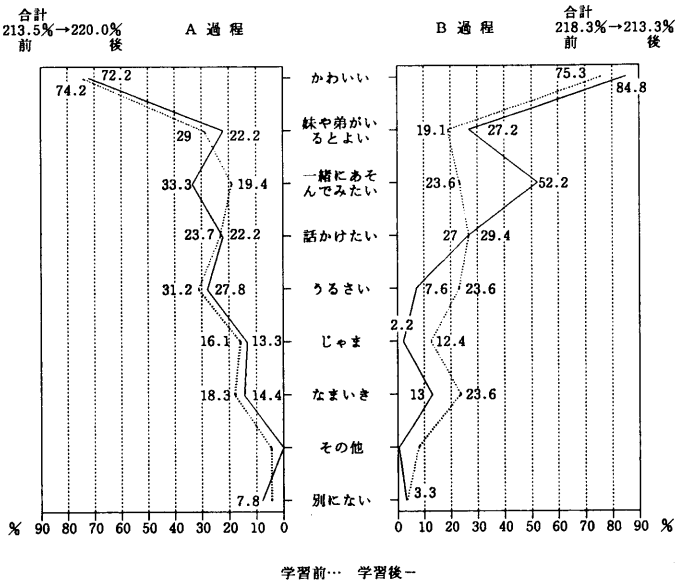


図7　保育学習による幼児観の変化

学習後のアンケート結果では、A・B両過程とも幼児観はプラス方向の項目が変化し、特にB過程においては「一緒に遊んでみたい」と思う生徒が23.6%から52.2%と大きく変化した。これは、保育園訪問の大きな成果であった。A過程でも「一緒に遊んでみたい」が一番大きな変化を示し、16.4%から33.3と13.9%増となった。これは、製作したおもちゃが、本当に喜んでもらえるかどうかという期待と不安のいりまじったものであった。また、学習後は両過程ともマイナス方向の項目は減少しており、幼児のことをよく知る機会を持てば、好意的な感情を持てるという成果が得られた。人間関係を成立させるためには、互いによく知ることが大切であった。

生徒自身の幼児期の感想については、A・B過程とも「なつかしい」「その頃に戻りたい」など、よい思い出を持っており、学習を進めるうえで生徒に働きかけがやり易い状況であった。生徒が幼児期について、いやな思い出を待っている場合には、プライバシーにもかかわることであり、授業の際には発問などに充分配慮する必要があった。

保育学習に対する興味と必要性では、事前の保育に対する興味はA・B過程ともやや興味がある、とこたえる生徒が多く平均評点A、Bともに3.2でどちらともいえないに位置づけられた。保育学習の必要性については、どちらとも言えない、やや必要とこたえる生徒が多く、平均評点3.3、3.4でどちらとも言えないに位置づけられた。事後の保育に対する関心は、Aではやや関心が増した、前と同じとこたえるものが多く、3.7で、Bは関心が増した、やや増したとこたえる生徒が多く、平均評点4.3で両過程ともやや関心が増したに変わり、B過程の方が評点が高かった。必要性については、Aはどちらとも言えない、やや意義があったとこたえる生徒が多く平均評点3.9で、Bは学んで良かったが高率で平均評点4.3で両過程ともやや意義があったと尺度が一段階プラス方向に変わった。B過程の平均評点が高いのは、保育園訪問を実施しプラス方向の意識が高くなったからであろう。幼

児と接する機会が多いと、それだけ幼児についての見方や考え方について、自分なりの意見を持ち、学習の必要性も増すものと思われる。これらのことから、対象となる人間の身近な存在は、人間関係育成の学習過程においては大切な要因となった。

生徒が実際に製作したおもちゃの種類は図8に示すように、A過程は模倣・創造遊びのおもちゃが48.9%と約過半数を占め、次に運動遊び、構成遊びのおもちゃとなった。

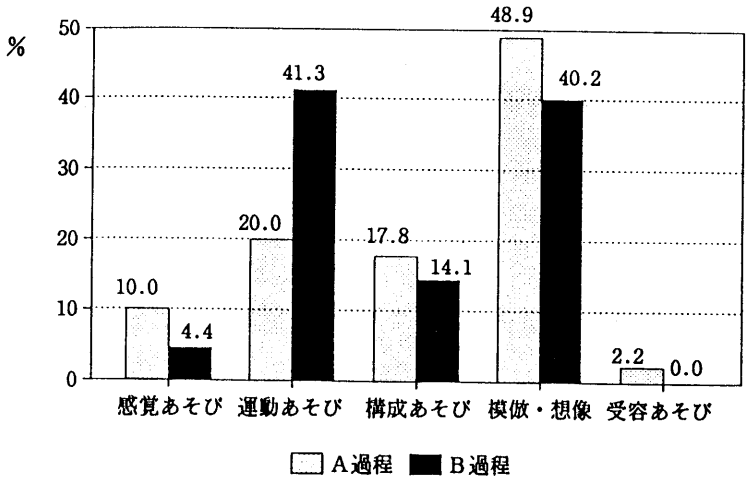


図8　中学生が製作したおもちゃの種類

B過程は運動遊び41.3%、模倣・創造遊び40.2%とこの2種類でほとんど占めた。これは、図9に示すようにA・B両過程とも提示されたおもちゃを参考にして、自分たちのおもちゃを考案していく場合が多いが、A過程は生育歴を通して幼児を理解していくため、「小さい頃」を参考にし、自分の幼児期の遊びを念頭におき、個人に属するものや家庭内での遊びのイメージがあったと考えられた。また、B過程は保育園の幼児観察の結果、集団で活動している場面や、先輩達の残していった写真やスライドなどを参考にしており、製作したおもちゃを保育園へ持っていって幼児と一緒遊ぶのだという意識があったものと考えられる。

製作後の気持ちは、図10に示すように、A過程は特に幼児におもちゃを与える機会を設定しなかったため「楽しかった」「達成感」が高率を示し、製作そのものを楽しみ、やってよかったと感じとっているが、そのなかでも「幼児を考えて」や「触れ合い」など、幼児との人間関係に目をむけている生徒がいることは好ましいことであった。

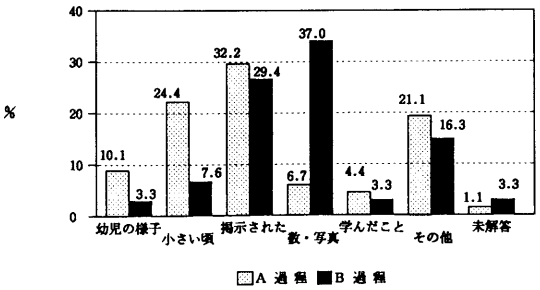


図9　中学生がおもちゃ製作時に参考にしたこと

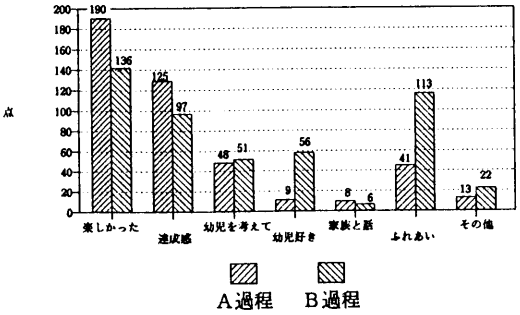


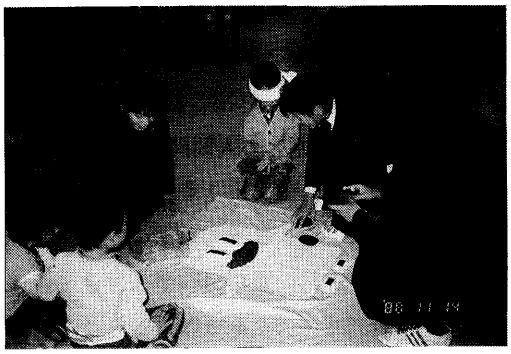
図10　おもちゃ製作後の気持ち

B過程は保育園へおもちゃを持っていき、幼児と一緒に製作したおもちゃを使って遊んでいるので、「楽しかった」「達成感」だけでなく「触れ合い」「幼児を好き」「幼児を考えて」と、より幼児との人間関係に目を向けていた。A・B両過程で、学習過程が異なることもあり、生徒は幼児に対して好意を抱き、よい人間関係を持つことができた。保育学習では、幼児の生活の基盤である「遊び」を通して幼児と生徒の触れ合いを実現できた。

保育園訪問の様子を写真2－①～④に示した。

①　ボール遊び

②　音のでるエプロン



③　おばQ福笑い

④　キュウキュウ人形

写真2　中学生の保育園訪問の様子

以上、幼児と生徒との人間関係を育成するための手段として、おもちゃ作りを授業の中に取り入れた結果、おもちゃ作り、幼児観察などを通して、生徒は学習以前より、より一層幼児に対して親近感を持ち、幼児との人間関係育成に役立つものであった。

A過程では、幼児期の大切さがわかり、自分を理解したり考えるきっかけになった、家庭や親子のつながりの重要さや親の気持ちが理解できたなど自己の内面や家族に目をむけたことが特徴であった。B過程では、幼児に親しみが持てた、おもちゃを使ってもらってうれしかった、遊んで楽しかった、遊びの重要性がわかったなど幼児との遊び体験が強く印象に残っていた。おもちゃの素材のうちベルベットクロスや鳴き笛は幼児の感覚統合に有効に作用した。幼児の生活マットのうち幼児の生活感と最も一致したのは室内マットであった。

3．地域社会の老人との人間関係（高校生の場合）

物質が豊かで不便さも知らず核家族で育ってきている若い世代の多くは、高齢者との交流の場が希薄になり、大切な古い文化を伝えにくくなっている。また、一方老年期は機能低下と共に、疾病、孤独、焦燥、不安、恐怖等の心の痛手を負い寡黙し、生き甲斐を失いがちである。

本研究では、現行教育課程では取り扱うことの少ない高齢化社会への対応として「老人との人間関係」に視点を置き、実態調査により、老人の内面を知る手がかりを得、人間関係を育成する手段として生活マット・小物作りを行った。

1）　祖父母に対する高校生の意識

祖父母の年齢構成は70～74齢が最も多く、次いで65～69齢であった。

老人の健康と生活状態を図11に示した。健康上は祖父63%、祖母72%が健康で、同居している老人は健康な人が多かった。また、その老人の生活状況は、祖父では「働いている」が37.3%、祖母は「家事をしている」が37.2%でそれぞれ最も多く、若い時代の生活状況が反映しているものと思われる。

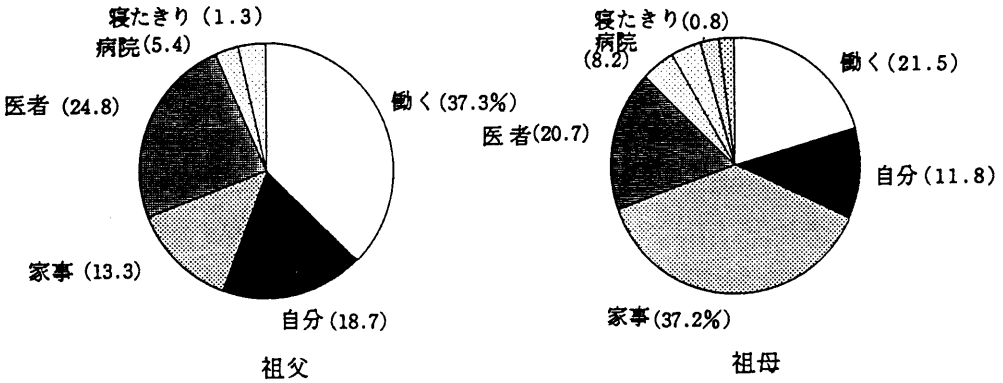


図11　老人の健康と生活状況

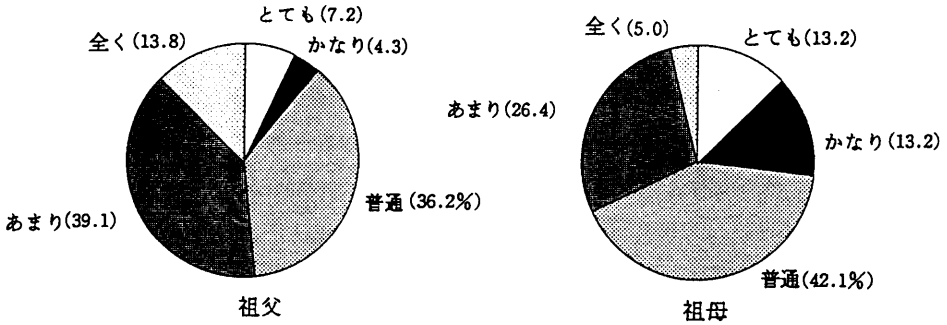


図12　高校生と祖父母との対話

高校生と祖父母との対話を図12に示した。祖父母との対話は、「とてもよく話す」「かなりよく話す」は祖母の方が高率であった。祖父の平均評点は2.5、祖母は3.0と0.5の差があり、それぞれ「普通」に位置づけられた。一方、会話の全くない同居老人の孤独な姿もあり、生徒に気づかせることが課題であると思われた。

祖父母との対話の内容は「学校のこと」が最も多く、次いで兄弟や食べ物のことであった。子どもの頃のこと、父母のことなどの話題は祖父母との対話から生まれる内容ではないかと考えられる。

老人と生活して良いこと、嫌なことの調査結果を図13でみると、老人は生活していく知識や知恵が豊富であり、相談できること、家のまとめ役としての存在も認めていた。一方、考え方が古い、子どもっぽいなど嫌な点も指摘していた。

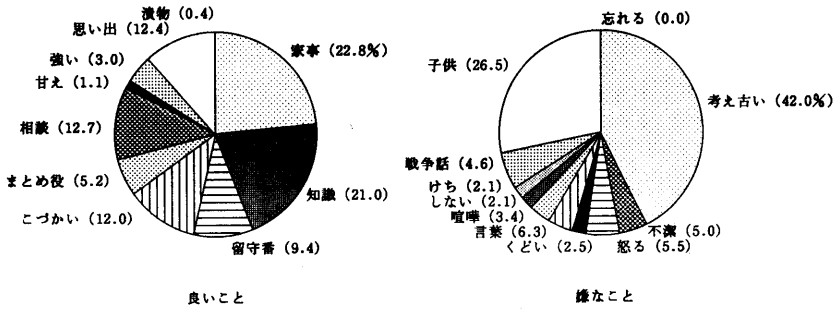


図13　高校生が老人に抱く良いこと嫌なこと

老人はどのような気持ちで毎日を過ごしているかの設問では、「迷惑をかけないように暮したい」が17.2%で最も高率であった。身近にいる老人から健康な高齢化を希望する若者の思いを伺うことが出来た。また「老人としての悩みをかかえている」16.4%、「友だちがほしい」12.9%など高校生は老人の気持ちをほぼ適確に把握していたように推測できた。(図14)

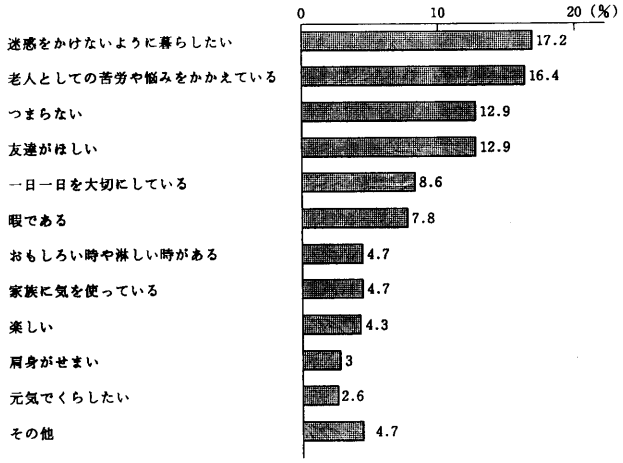


図14　老人が毎日を過ごす気持ち

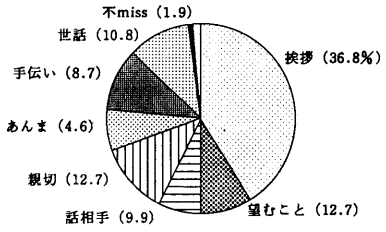


図15　高校生が地域の老人にしてあげたいこと

地域の老人にしてあげたいことは「挨拶」36.8%が1位で、次に「望むことをしてあげたい」、「親切」がそれぞれ12.7%と続き、「話相手」、「手伝い」、「あんま」などから若者自身が積極的に触れ合いを求めていることを知ることが出来た。(図15)

2)　特別養護老人ホームでの聞き取り調査

前記祖父母に関する高校生の意識調査結果をもとに3年生女子45名が特別養護老人ホームへでかけ聞き取り調査をした。これらの生徒は一年に1回以上このホームで食事、介助、話相手など奉仕活動をしている生徒達である。生活マット、小物作りの予備調査として、老人の幼年期や若年時代の話などを聴き項目ごとにまとめた。また、ホーム内の生活指導員や寮母より目的にあった製作物の考案のため、入所時の様子、生活内容、身体状況などの資料を得た。

3)　生活マット・小物作り

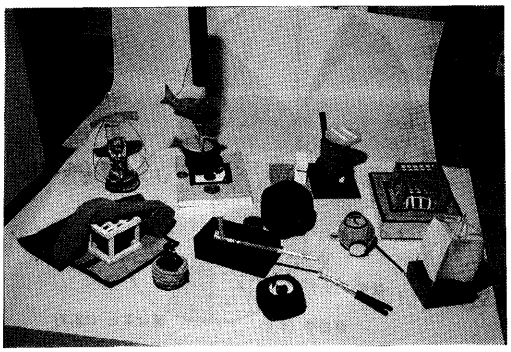
生活マット・小物作りをするにあたり、次の点に配慮した。

①　老人がこれまでの長い期間ついやしてきた生活経験や習慣を生かした生活マットや小物にする。

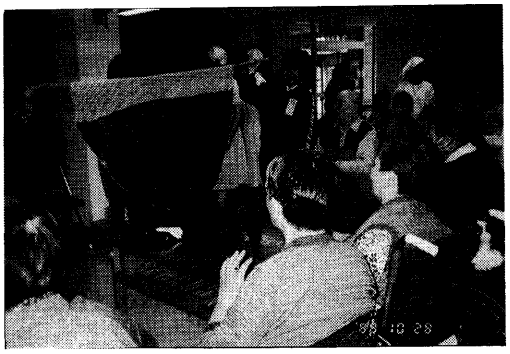
②　失われた機能を回復させるため、または失われつつある機能を維持するための目的をもつリハビリ的なものを工夫する。

③　ゲームとして意欲的に取り組む要素を加えたものとする。

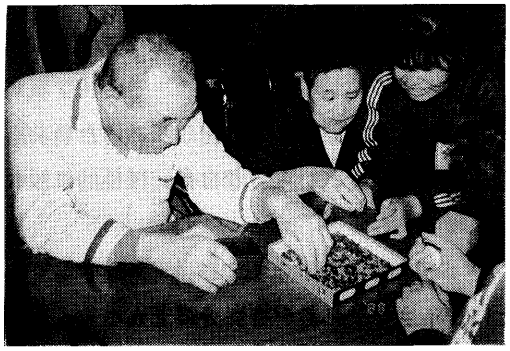
これらの点を考慮して、課外活動を利用してグループごとに目的に合うものを考案し、製作した。製作品にはそれぞれ名称をつけ、目的と期待される訓練を考慮した。制作過程で「老人は喜んでやってくれるだろうか」「この色はよく見えるだろうか」「布で包むと鳴き笛の音が聞こえ難くなるのでは？」などグループ内の話合いが活発になり相手を思いやり、方法や内容を考えたり、工夫したり、生徒一人ひとりが努力する姿勢が認められた。また、各自の家庭にいる祖父母を通して製作物の良否を推測したり、アイデアを相談したりする生徒も幾人か出てきて望ましい人間関係が育ち生徒の変容が認められた。



① 昔の生活用品



② スイカゲーム



③ 豆いれ

④ キュキュ人形

写真 3　高校生が製作した老人のための作品

ア）ふるさとマット：これは老人の聞き取り調査を基に当時の雰囲気を持つかやぶき屋根の家、魚を取ったり泳いだりした海岸風景、年に一度の家族揃って外出できるお祭りの3場面を一枚のマットにまとめた。高校生と老人がふるさとマットと小物を使って対話ができるこのマットは言語障害や記憶喪失などの回復と世代の隔たりを取りなす導入役として効果が顕著であった。

イ）昔の生活用品：自在かぎや洗濯板などはふるさとマットから発展させ老人が身近に使った昔の生活用品である。（写真3－①）

ウ）スイカゲーム：布マットにスイカの一切れを赤いベルベットクロスでアレンジし、スイカの種にみたてた黒いマジックテープで覆ったピンポン玉を投げつけて、くっける遊びである。半身麻ひや手の不自由な老人も生徒に励まされながら投げ、皆でゲームを楽しみ励まし合う友好的な関係が生まれた。（写真3－②）

エ）お祭りスゴロク：お祭りスゴロクと名付けたもので大きなスゴロクを投げて得点を入れて行くものである。生徒のアイデアと苦心が生きた作品の1つである。

オ）魚釣りマット：長い竿で魚を釣るゲームは「釣れた」という成就感を味わえ、コミュニケー

ションもはかれるよいマットであった。

次に指先の訓練として効果的でった小物を紹介する。

カ）豆入れ：赤、緑、黄色の３色に分けた大豆を一定時間内に別な箱に移す遊びで競争したりすると面白い。指先に麻痺を持つ老人にとって好遊具であった。（写真３－③）

キ）ぶどう：ぶどうの１粒ずつをマジックテープ、またはスナップでとめつけて、ぶとう１房を形作る遊具である。生徒の励ましに笑顔でこたえ、完成時の老人は子どものように喜び、生徒を感激させた。

ク）キュキュ人形：鳴き笛の音からキュキュ人形と名付けたもので、握ると音の出る意外性が喜ばれ、全盲の老人にも笑みが浮かんだ。老人が歌を歌い、生徒が手拍子を打ち、老人達がキュキュと音を出し即席合唱団ができ楽しい雰囲気が流れた。（写真３－④）

これら触れ合い実践後の感想は、「老人の気持ちがわかるようになった」「新しいことが発見できた」、今までより「老人が身近に感じられた」など33.3%を占め老人との人間関係が前進したことが認められた。老人が、昔使った生活用品や道具を媒介として高校生が老人から昔の生活の話を聴き

表４　老人とのふれあい実践後の高校生の感想

小文字：度数

単　位：％

項　目 対　象	一緒に遊べて楽しかった	老人が喜んでくれて良かった	老人の気持ちがわかるようになった	新しいことが発見できた	また作ってやりたい	もっと工夫すれば良かった	やりにくい人もいた	不安がきえた
全体　N＝45 ３年女子	10 22.3	9 20.0	9 20.0	6 13.3	5 11.1	3 6.7	2 4.7	1 2.2

お互いに好意的態度になり得たのは、心理学で言う交流分析（桂戴作ら、1987）[2]では次のようになろう。最初老人の大人の心(A)を生徒の保護的な優しい心（NP）が受け止め、次の段階では老人の自由な子どもの心(FC）を同じく生徒のNPで受け止め、さらに、生徒のNPから老人のFCに働きかけ交流した結果、お互いの好意的態度あなたもOK、わたしもOKとして認められたものと思われる。老人とのこの触れ合いから生徒は多くの学ぶべき生き方を感じ取った。今後は、老人との人間関係から先人の生活の知恵や尊い人生の意義を学び、心豊かに発展させるため、若者の役割に気づかせていきたいものと考える。

４．教材研究の立場からの評価（大学生の場合）

家庭と地域社会の中の人間関係を育成する生活マット・小物作りに関する実践的研究について「望ましい家庭科の授業のための諸要素に対する教員要請課程学生の認識」を３点段落評点で図16に示した。望ましい家庭科の授業のための諸要素20項目のうち、No.16「児童・生徒が主体的に授業に参加できるように工夫してあった」が1820点で最も高く、次がNo.３「児童・生徒の個性を把握し伸ばすためにも、授業内外においてコミュニケーションをはかるように努力した」1732点で、３位はNo.19「学習したことがらが、家庭での実践に結びつくようにしてあった」1441点、４位はNo.18「児童・生徒がもっと学びたいという欲求を起こさせるように工夫してあった」1299点、そして５位は

No.8「動機づけが授業に有効に生かせるように工夫してあった」1185点と続いた。No.16「児童・生徒が主体的に授業に参加できるように工夫してあった」は全国の家庭科教師が最も困難に感じた項目とされている（佐藤文子、1986）[3]。本実践研究で最も高得点に位置づけられたことは、どのような動機づけをしたら主体的に取り組むか、どのような授業環境を整えたらいいのかの課題に対する試みの成果と見て良いであろう。

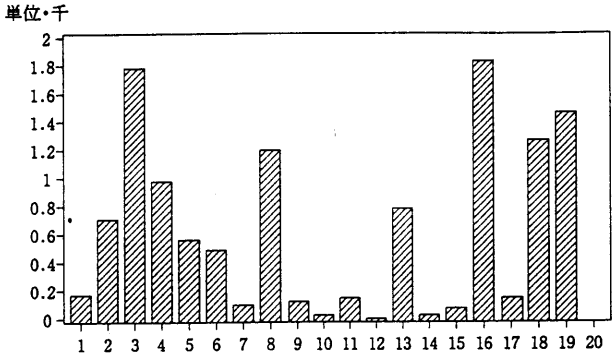


図16　望ましい家庭科の授業のための諸要素に対する教育学部生の認識

1. 社会的背景とニーズをおさえる。
2. 児童・生徒の実態をよくつかむ。
3. 児童・生徒の個性を把握し伸ばすためにも、授業内外においてコミュニケーションをはかるように努力する。
4. 家庭科の本質をおさえた授業にする。
5. 題材の目標をきちんとおさえ、生徒に教えるべきことをしっかりつかませる。
6. 発達に応じた学習内容であるように注意する。
7. 幅広く参考文献にあたり、教材研究を充分にすること。
8. 動機づけが授業に有効に生かせるように工夫する。
9. 導入方法に工夫をこらす。
10. 適確な資料を豊富に用意する。
11. 有効な教具や視聴覚器材、教材をできるだけ活用する。
12. 教科書の使い方を工夫する。
13. 普通の授業（たとえば講義、話し合い、問答等によるもの）と異なったアイデアの指導方法でやってみる。
14. 時間配分を工夫する。
15. 児童・生徒につまづき個所を意図的に創ったり、ショックを与えるように工夫する。
16. 児童・生徒が主体的に授業に参加できるように工夫する。
17. 児童・生徒に“ああ、そうか”、“よく、わかった”と言わせるように工夫する。
18. 児童・生徒がもっと学びたいという欲求を起こさせるように工夫する。
19. 学習したことがらが、家庭での実践に結びつくようにする。
20. その他（回答欄に具体的に御記入くださるようお願い致します。）

児童・生徒への教育的効果とその理由は、5段階尺度で「非常に意義がある」49.4%、「意義がある」47.5%、併せて96.9%と多く、平均評点4.7で「非常に意義がある」に位置づけられた。その理由は「家族間の交流の媒介となる」が3点段落評点3375で最も高く、次いで「家族への愛情を深めることができる」が2754点であった。児童・生徒と家庭や地域社会おける人間関係についての項目が、意義があった理由として多くあげられた。

IV まとめ

本研究では、各学校段階の児童・生徒の成長・発達に合わせた「家族や地域社会の人々との人間関係」に視点をおいた。教材として生活マット・小物作りを取り上げ、その製作課程と作品を、小学校ではお互いの人間関係や家族、中学校では幼児、そして高等学校では老人を対象として、心のふれあい合いの手段として活用した。学校段階別に仮説をたてその検証のための実践研究を行った。

1．家庭における家族との人間関係：小学校の現行学習指導要項の小物作りの単元は、個人の製作技術の修得をねらいとしているが、本研究ではさらに人間関係を育成することを目標とした。グループを中心にした児童同士の学習は、認め合う喜びや、向上意欲を満足させた。小物作りの発想は、従来の小物の種類より多様な小物に発展した。家族への贈物の学習は、家族全員、母へ、父と祖父母など、家族への思いやりが広がった。さらに、小物の素材の面白さ、製作過程を工夫した学習が好意的な人間関係を育成させる一要因であったと考えられた。

2．家庭や地域社会の幼児との人間関係：中学校の学習A過程では、自己の内面や家族に目をむけたことが印象に残っていた。C過程は両過程の長所を持ち合わせていた。おもちゃの素材のうちベルベットクロスや鳴き笛は幼児の感覚統合に有効に作用した。幼児の生活マットのうち幼児の生活感と最もよく一致したのは室内マットであった。

3．地域社会における老人との人間関係：高校生の生活マット・小物作りには、老人の生活体験に基づく内容のもの、機能回復或は機能維持の目的を持ったもの、ゲーム的要素のあるものなどを考慮し製作した。生徒にとっての収穫として、①老人への有効的な小物を自分達の力で考案し、製作できたこと。②小物を地域社会の人間関係を発展させる媒体として活用できたこと。③高齢化社会への対応の具体的方法の一例を会得できたことは、生徒自身の大きな自信となった。

老人にとっては家族、友人、社会との「関係の喪失」からくる精神的喪失感を回復した。

4．教材研究の立場からの評価：大学生は教材研究の立場から、本実践研究は児童・生徒が主体的に授業に参加できるように工夫されており、学習された内容は、児童・生徒と家庭や地域社会における人間関係の交流の媒介となり、愛情を深めることのできる実践であり、教育的に「非常に意義があった」と評価した。

文　献

1)高橋類子、斎藤新治、木村節子、岸本洋子、本多満喜子、阿部照美、長谷川かよ子、桑原信子：「人間関係を育成する家庭科の学習内容」、日本家庭科教育学会編、家庭科教育'87時代に応える—カリキュラムの研究—、3～9（1987）

2）桂戴作、杉田峰康、白井幸子：交流分析入門、KKチーム医療、(1987)

3）佐藤文子：望ましい家庭科の授業のための諸要素の探索、日本家庭科教育学会誌、29(1)　5～10（1986）